

山に入ると道は舗装されていないので街中とは足裏の感触が違う。道が舗装されだしたのは戦後になってからではないだろうか。自動車も殆どなく、土の道路に穴を掘りビー玉で遊んだ。日本列島改造などと呼ばれ、車が多くなると道路を舗装する必要が出てきて、それまで処理の困っていたアスファルトがどこにでも使える舗装材だともてはやされ、今や全国どこでもアスファルト舗装がされている。

道路は車が通るようになり道幅が広がった。江戸時代、主要な道路でも3間（約6m）もあれば立派なものだったが、今や小さな団地の生活道路でも6m道路になっている。車も通るが、もちろん人も通る。犬も通るだろうがすき好んで道を通っているようとは思えない。そう考えると道は人だけの利用のために出来たものになる。山の中に高速道路を作れば人は利用するが、そこを今まで使っていた動物から見れば障害物の柵だろう。高速道路でなくても普通の交通量の多い道なら向こう側に行くには命がけだ。鹿に注意の看板があり、鹿は交通事故にあっても人(鹿)身傷害金も出なければ、交通事故の加害者扱いされる。

地図には地上にある物を書き留める。街中で書くのは鉄道も建物もあるだろうし、人や車も通っているだろうがやはり道路の勢力がずば抜けている。街を離れた所や山中では道路は線になって、田畑や林が主役になる。道を作って生活するのは当たり前で、道路を新設するときは土地所有者は道を提供しなければ変な目でみられる時代だ。

江戸時代は、村に道を作ることは今と逆の話だ。道をつくることは、田を土地を減らすことになる。それに道路を新設するとか拡幅するとかになる必要性が少ないのだろう。それより、荒れた土地に新田を開発する方に藩も農民も力をいれていた。山あいにある急な段々畑、見事な棚田をみると感心するほどだ。現在では、山沿いの山間部で、そこを通る道は山間部の真ん中を真っすぐに走るだろうが、昔の道路は山沿いをクネクネ曲がる道だ。田の中央にドカンと年貢が減る広い道路を昔の人がみたらどう思うだろうか。

道路が出来て耕地が減ることは、その減ったものを他の何処かで作らなければいけない。道路だらけの街になったら外の世界で作ったものを、作った道路で運んでこなければいけない。そのために又遠くから続く立派な道を作らなければいけない。グローバルは世界には道が必要だが、道はどこまで必要なのだろうか。